

# 置土産

国木田独歩

青空文庫



餅もちは円形まるきが普通なみなるわざと三角にひねりて客の目を惹ひかんと  
 企たくみしようなれど実は餡あんをつつむに手数てすうのかからぬ工夫不思議に  
 あたりて、三角餅の名いつしかその近在に広まり、この茶店ちややの小  
 さいに似合なわぬ繁はんじよう盛せい、しかし餅ばかりでは上戸じようごが困るとの  
 若連わかれんじゆう中ちゆうの勧告すすめもありて、何はなくとも地酒じさけ一杯飲めるように  
 せしはツイ近ごろの事なりと。

戸数こすう五百に足らぬ一筋町の東の外はずれに石橋あり、それを渡れば  
 商あきん家とやでもなく百姓家でもない藁葺わらぶき屋根の左右りよう両そく側に建  
 ち並ぶこと一丁ばかり、そこに八幡宮はちまんぐうありて、その鳥居とりいの前か  
 らが片側町かたかわまち、三角餅の茶店ちややはこの外れにあるなり。前は青田、

青田が尽きて塩浜、堤高くして海<sup>うみづら</sup>面こそ見えね、間近き沖には大島小島の趣も備わりて、まず眺望<sup>ながめ</sup>には乏しからぬ好地位を占むるがこの店繁盛の一理由なるべし。それに町の出口入り口なれば村の者にも町の者にも、旅の者にも一<sup>ひとやすみ</sup>休息腰を下ろすに下ろしよく、ちよつと一ぷくが一杯となり、章魚<sup>たこ</sup>の足を肴<sup>さかな</sup>に一本倒せばそのまま横になりたく、置座<sup>おきざ</sup>の半分遠慮しながら窮屈そうに寝ころんで前後正体なき、ありうちの事ぞかし。

<sup>ながねん</sup>永年<sup>んぱた</sup>の繁盛ゆえ、かいなき茶店<sup>ちやみせ</sup>ながらも利得は積んで山林田<sup>で</sup>

畑<sup>んぱた</sup>の幾町歩は内々できていそうに思われるれど、ここの主人<sup>あるじ</sup>に一つの癖あり、とかく塩浜に手を出したがり餅でもうけた金を塩の方<sup>な</sup>で失くすという始末、俳諧の一つもやる風流気<sup>ぎ</sup>はありながら店

にすわつていて塩焼く烟けむりの見ゆるだけにすぐもうけの方に思い付  
 くとはよくよくの事と親類縁者も今では意見する者なく、店は女  
 房まかせ、これを助けて働く者はお絹きぬお常つねとて一人は主人あるじの姪めい、  
 一人は女房の姪、お絹はやせ形がたの年上、お常は丸く肥りふとて色白く、  
 都ならば看板娘の役なれどこの二人は衣装なりにも振りにも頓とん着ちやく  
 なく、糯もち米こめを磨とぐことから小豆あずきを煮ること餅つを舂つくことまで男  
 のように働き、それで苦情一つ言わずいやな顔一つせず客にはよ  
 けいなお世辞の空笑いできぬ代わり愛相あいそよく茶もくんで出す、何  
 を楽しみでかくも働くことかと問われそうで問う人もなく、感心  
 な女とほめられそうのぼで別に評判あいさつにも上らず、『いつもご精がしま  
 す』くらいきの定まり文句の挨拶あいさつをかけられ『どういたしまして』

と軽く応えてすぐ鼻唄はなうたに移る、昨日きのうも今日きょうもかくのごとく、かくて春去り秋逝ゆくとはさすがにのどかなる田舎いなかなりけり。

茶店のことゆえ夜よに入れば商売なく、冬ならば宵から戸を閉しめてしまふなれど夏はそうもできず、置座おきざを店の向こう側なる田のそばまで出しての夕涼み、お絹お常もこの時ばかりは全くの用なし主人あるじの姪あはらしく、八時過ぎには何も片づけてしまひ九時前には湯を済まして白地しろじの浴衣ゆかたに着かえ団扇うちわを持って置座おきざに出たところやはりどことなく艶なまめかしく年ごろの娘なり。

よそから毎晩のようにこの置座おきざに集まり来る者二、三人はあり、その一人は八幡宮神主の悴せがれ一人は吉次きちじとて油の小売り小まめにかせぎ親もなく女房もない気楽者その他ほかにもちよいちよい顔を出す

者あれどまずこの二人を常連と見て可なるべし。二十七年の夏も  
 半ばを過ぎて盆の十七日踊りの晩、お絹と吉次とが何かこそこそ  
 親しげに話して田圃たんぼの方へ隠れたを見たど、さも怪しそうにうわ  
 させし者ありたれど恐らくそれは誤解ならん。なるほど二人は内  
 いしよばなし  
 密話しながら露繁しげき田道をたどりしやも知れねど吉次がこの  
 ごろの胸はそれどころにあらず、軍夫ぐんぶとなりてかの地に渡り一か  
 せぎ大きくもうけて帰り、同じ油を売るならば資本もとでをおろして一  
 構えの店を出したき心願、少し偏屈な男ゆえかかる場合に相談相  
 手とするほどの友だちもなく、打ちぶまけて置座會議のぼに上して見る  
 ほどの気軽うまれの天稟うまれにもあらず、いろいろ独ひとりで考えた末が日ごろ  
 何かに付けて親切に言うてくれるお絹お常にだけ明かして見よう

とまずお絹から初めるつもりにてかくはふるまいしまでなり、うたてや吉次は身の上話を少しばかり愚痴のように語りしのみにてついにその夜は軍夫の一件を打ち明け得ずしてやみぬ。何のことぞとお絹も少しは怪しく思いたれど、さりとして別に気にもとめざりしようなり。

その次の夜よも次の夜も吉次の姿見え、三日目の夜の十時過ぎで、いつもならば九時前には吉次の出て来るはずなるを、どうした事やらきのうも今日きょうも油さえ売りにあるかぬは、ことによるとかぜ風邪でも引いたか、明日あすは一つ様子を見に行つてやろうとうわさをすれば影もありありと白昼ひるまのような月の光を浴びてそこに現われ、



『皆さん今晩は』といつになきまじめなる挨拶、黙つて来て黙つて腰をかけあくびの一つもするがこの男の柄なるを、さりとは変なと気づきし者もあり気づかない者もあり、その内にもお絹はすこぶる平氣にて、

『吉さんどうかしたの。』

『少し風邪を引いて二日ばかり休みました』と自ら欺き人をごまかすことのできざる性分のくせに嘘をつけば、人々疑わず、それはそれはしかしもうさっぱりしたかねとみんなよりいたわられてかえつてまごつき、

『ありがとう、もうさっぱりとしました。』

『それは結構だ。時に吉さん女房にようぼを持つ気はないかね』と、突だ

しぬけ  
然におかしな事を言い出されて吉次はあきれ、茶店の主人幸  
衛門もんの顔をのぞくようにして見るに 戯談じょうだんとも思われぬところあり。

『ハイ女房ね。』

『女房をサ、何もそんなに感心する事はなからう、今度のよう  
ちよつとした風邪かぜでも独身者ひとりものならこそ商売あきないもできないが女房  
がいれば世話もしてもらえる店で商売もできるといふものだ、そ  
うじゃアないか』と、もつともなる事を言われて、二十八歳の若  
者、これが普通なみならば別に赤い顔もせず何分よろしくとまじめで  
頼まぬまでも笑顔えがおでうけるくらいはありそうなところなれど吉次  
は浮かぬ顔でよそを向き

『どうして養いましょう今もらつて。』

『アハハハハハハ麦飯を食わして共ともかせ稼かせぎをすればよかろう、何もごちそうをして天神様のお馬じやアあるまいし大事に飼つて置くこともない。』

『吉さんはきつとおかみさんを大事にするよ』と、女は女だけのみため鑑定をしてお常正直なるところを言えばお絹も同意し

『そうらしいねエ』と、これもお世辞にあらず。

『イヤこれは驚いた、そんなら早い話がお絹さんお常さんどちらでもよい、吉さんのところへ押しかけるとしたらどんな者だろう』と、神主のせがれ悴わかれの若旦那わかだんなと言わるるだけに無遠慮なる言い草、お絹は何と聞きしか

『そんならわたしが押しかけて行こうか、吉きつさんいけないかね。』  
『アハハハハばかを言ってる、ドラ寝るとしよう、皆さんごゆ  
つくり』と、幸衛門の叔父おじさん歳としよりも早く禿はげし頭をなでなが  
ら内に入りぬ。

『わたしも帰って戦争の夢でも見るかな』と、罪のない若旦那の  
起たちかかゝるを止めるように

『戦争はまだ永く続きそうでございますかな』と吉次が座興なら  
ぬ口ぶり、軽く受けて続くとも続くともほんとの戦争はこれから  
なりと起たち上がり

『また明日あすの新聞が楽しみだ、これで 敗まけ 戦いくさだと張り合いがな  
いけれど我軍こっちの景気がよいのだから同じ待つにも心持ちが違ちがうよ

『お寝やすみと帰かえつてしまえば後は娘二人と吉次のみ、置座おきざにわか

に広ひろうなりぬ。夜はふけ月さえぬれど、そよ吹く風さえなければ

ムツとして蒸し熱き晩なり。吉次は投なげるように身を横よこにして手

荒あく団扇うちわを使いホツとつく嘆ためいき息を紛まらせばお絹

『吉きちさんまだ風邪かぜがさつぱりしないのじゃアないのかね。』

『風邪かぜを引いたというのは嘘うそだよ。』

『オヤ嘘うそなの、そんならどうしたの。』

『どうもしないのだよ。』

『おかしな人だ人に心配しんぱいさせて』とお絹は笑わらうて済すまますをお常とねは

『イヤ何か吉きちさんは案あんじていなさるようだ。』

『吉きちさんだつて少しは案あんじ事こともあろうよ、案あんじ事ことのないものは馬ば

鹿かと馬鹿うましだというから。』

『まだある若旦那』と小さな声で言うお常もその仲間なるべし。それよりか海に行いこうとお絹の高い声に、店の内にて、もう遅おそいゆえやめよというは叔父なり、

『叔父さんまだ起きていたの、今汐しおがいつぱいだからちよつと浴びて来ます浅いとところで。』

『危あぶない険あぶない危あぶない険あぶない遅いから。』

『吉さんにいっしょに行つてもらいます。』

『そんならいいけれども。』

さアと促されて吉次も仕方なく連れだつて行けば、お絹は先に立ち往來を外はずれ田の畔くろをたどり、堤の腰を回めぐるとすぐ海なり。沖

はよく和なぎて漣さざなみの皺しわもなく島山の黒き影に囲まれてその寂しずなるは  
 深山みやまの湖水みづかとも思おもわるるばかり、足もとまで月影澄とみ遠とお浅あの  
 砂すな白しろく水みづ底そこに光ひかりれり。磯いそ高たかく曳ひき上げし舟ふねの中なかにお絹ぬいお常とねは浴ゆ  
かた衣かたを脱ぬぎすてて心地こころよげに水みづを踏ふみ、ほんに砂粒すなつぶまで数かずえらるる  
 ようなど、海うみ近く育そだちて水みづに慣なれたれば何なにのこわいこともなく沖おき  
 の方あたへずんずんと乳ちちの辺あたりまで出いずるを吉次きちじは見みて懐ふところに入れし籠かご  
つこう甲くわの櫛くし二板紙にばんしに包くるんだままをそつと袂たもとに入れ換かえて手て早はやく衣服きもの  
 を脱ぬぎ、そう沖おきへ出いないがいいとい言い言い二人ふたりのそばまで行いけば  
 『吉さんごらんよ、そら足の爪つめまで見みえるから』とお常とねが言いうに  
 吉次

『もうここらで帰かえろうよ。』

『背のとどかないところまで出ないと遊およいだ気がしないからわたしはもすこし沖へ出るよ』とお絹はお常を誘うて二人の身体からだ軽く浮かびて見る見る十四、五間先へ出いでぬ。

『いい心持ちだ吉さんおいでよ』と呼ぶはお絹なり、吉次は腕を組んで二人の遊ぶを見つめたるまま何とも答えず。いつもならばかえつて二人に止めらるるほど沖へ出てここまでおいでとからかい半分おもしろう遊ぶだけの遠慮ない仲なれど、軍夫を思い立ちてより何事も心に染まず、十七日の晩お絹に話しそこねて後はわれ知らずこの女に気が置かれ相談できず、独ひとりで二日三日商売もやめて考えた末、いよいよ明日あすの朝早く広島へ向けて立つに決めはしたものの餅屋の者にまるつきり黙ってゆく訳にゆかず、今宵こよい



こそ幸衛門にもお絹お常にも大略話あらましして止めても止まらぬ覚悟を見せん、運悪く流れ弾だまに中あたるか病気にでもなるならば帰らぬ旅の見納めと悲しいことまで考えて、せめてもの置土産おきみやげにといろいろ工夫したあげく櫛二枚を買い求め懐ふところにして来たのに、幸衛門から女房をもらえと先方は本気が知らねど自分には戯談じょうだんよりもつまらぬ話を持ち出されてまず言いそこね、せつかくお常から案じ事のあるらしゆう言われたを機会しおに今ぞと思うより早くまたもくだらぬ方に話を外はずされ、櫛を出すどころか、心はいよいよ重うなり、遊ぶどころか、つまらないやら情けないやら今遊ぶならば手足すくみてそのまま魚の餌えはともなりなん。

『吉きつさんおいでよ』とまたもお絹呼びぬ。

『わたしは先へ帰るよ』と吉次は早々陸へ上がる後ろよりそんならわたしたちも上がる待つていてと呼びかけられ、待つはずの吉次、敵にでも追われて逃げるような心持ちになり、衣服を着るさえあわただしく、お絹お常の首のみ水より現われて白銀の波をかき分け陸へと遊ぶをちよつと見やりしのみ、途をかえて堤へ上り左右に繁る萱の間を足ばやに八幡宮の方へと急ぎぬ。

老松樹ちこめて神々しき社なれば月影のもるは拜殿階段の辺りのみ、物すごき木の下の闇を潜りて吉次は階段の下に進み、うやうやしく額づきて祈る意に誠をこめ、まず今日が日までの息災を謝し奉り、これよりは知らぬ国に渡りて軍の巷危うきを犯し、露に伏し雨風に打たるる身の上を守りたまえと祈念し、

さてその次にはめでたく帰国するまで幸衛門を初めお絹お常らの身に異変なく来年の夏またあの置座おきざにて夕涼ゆうべしく団居まどいする中にわれをも加えたまえと祈り終わりにしてしばしは頭かしらを得上げざりしが、ふと気が付いて懐ふところを探り紙包みのまま櫛二枚を賽銭箱さいせんばこの上に置き、他の人ほかが早く来て拾えばその人にやるばかり彼二人がいつものように朝まだき薄暗き中に参詣さんけいするならば多分拾うてくれそうなものとおぼつかなき事にまで思いをのこしてすすごと立ち去りけり。

お絹とお常は吉次の去った後あとそこそこに陸おかへ上がり体からだをふきな  
がら

『お常さん、これからちよいと吉さんの宅うちをのぞいて見ようよ、

様子が変だからわたしは気になる。』

『明日朝早くにおしよ、お詣りを済ましてすぐまわつて見ようよ。あんまり遅くなると叔父さんに悪いから。』

『そうね』とお絹もしいては勧めかね道々二人は肩をすり寄せ小声に節を合わして歌いながら帰りぬ。

\*

\*

\*

\*

若い者のにわかになくなってなくなる、このごろはその幾人というを知らず大概は軍夫と定まりおれば、吉次もその一人ぞと怪しむ者なく三角餅の茶店のうわさも七十五日経たぬ間に吉次の名さえ消えてなくなりぬ。お絹お常のまめまめしき働きぶり、幸衛門の

発句ほつくと塩、神主せがれの忤せがれが新聞の取り次ぎ、別に変わりなく夏過ぎ秋  
 逝ゆきて冬も来にけり。身を切るような風吹きて霽降みぞれる夜の、まだ  
 宵ながら餅屋ではいつもよりも早く閉しめて、幸衛門は酒一口飲め  
 ぬ身の慰なぐさみ藉なぐさみなく堅い男ゆえ炬燵こたつへ潜もぐつて寝そべるほどの楽もせ  
 ず火鉢ひばちを控ひえて巖ちやん然すわと座り、煙草たばこを吹かしながらしきりに首をひ  
 ねるは句を案ずるなりけり。

『猿さるも小篋こみのをほしげなりというのは今夜のような晩だな。』

『そうね』とお絹こたが応こたえしままだれも対あいて手にせず、叔母おばもお常も  
 針仕事に余念なし。家内やうちひつそりと、八角時計の時を刻む音ばかり外は物すごき風狂えり。

『時に吉さんはどうしてるだろう』と幸衛門が突だしぬけ然けの大きな声

に、

『わたしも今それを思っていたのよ』とお絹は針の手をやめて叔父の方を見れば叔父も心配らしいまじめな顔つき。

『叔父さんあつちは大変寒いところだというじやアありませんか』とお常は自分の足袋たびの底を刺しながら言いぬ。

『なに吉さんはあの身体からだだもの寒かんにあてられるような事もあるまい』と叔母は針の目を通しながら言えり。

『イヤそうも言えない随分ひどいという事だから』と叔父のいうに随ついてお絹

『大概にして帰って来なさればよいに、いくらお金ができても身か体らだを悪くすれば何にもなりやアしない。』

『十二あの男の事だからいったんかせぎに出たからにはいくらかまとまつた金を握るまでは帰るまい、堅い珍しい男だからどうか死なしたくないものだ。』

『ほんとにね』とお絹は口の中、うち 叔母は大きな声で

『大丈夫、それにあの人は大酒を飲むの何のと乱暴はしないし』  
と受け合い、びんほつれ 鬢の乱を、うるさそうにかきあげしその櫛くしは吉次の  
おきみやげ 置土産、あの朝お絹お常の手に入りたるを、お常は神のお授け  
と喜び上等ゆえ外よそゆ 出行きにするようだんす と用筆筒の奥にしまい込み、お  
絹は叔母にしよもつ 所望されて与えしなり。

二十八年三月の末お絹が親もとより二日ばかり暇をもらうて帰  
り来こよとの手紙あり、珍しき事と叔父幸衛門も怪しみたれども

かくも帰つて見るがよかろうと三里離れし在所の自宅へお絹は三角餅を土産に久しぶりにて帰りゆきぬ。何ぞと思えば嫁に行けとの相談なり。継母ままははの腹は言うまでもなく姉のお絹を外に出して自分の子、妹のお松を後に据えたく願い、それがあつたばかりにお絹と継母との間おもしろからず理屈をつけて叔父幸衛門にお絹はあずけられかれこれ三年の間お絹のわが家に帰りしは正月一度それも機嫌きげんよくは待遇あしらわれざりしを、何のかのと腹にもない親切を言われ先方は田が幾町山がこれほどある、婿はお前も知つていゝるはずと説かれてお絹は何と答えしぞ。その夜七時ごろ町なにかしなる某という旅人宿はたごやの若者三角餅の茶店に來たり、今日これこれの客人見えて幸衛門さんに今からすぐご足労を願いますとのことなり。



幸衛門は多分塩の方の客筋ならんと早速さつそくまかり出いでぬ。

次の日奥の一室ひとまにて幸衛門腕こまぬき、茫然ぼうぜんと考えているところへお絹在所より帰り、ただいまと店に入はいればお常はまじめな顔で

『叔父さんが奥で待っていないさるよ、何か話があるって。』

お絹にも話あり、いそいそと中庭から上がれば叔父の顔色ただならず、お絹もあらたまつて

『叔父さんただいま、自宅うちからもよろしくと申しました。』

『用事は何であったね、縁談じやアなかつたか。』

『そうでございました、難波なんばへ嫁にゆけというのであります。』

『お前は どうして』と問われてお絹ためらいしが

『叔父さんとよく相談してと生返事なまをして置きました。』

『そうか』と叔父は嘆息ためいきなり。

『叔父さんのご用というのは何。』

『用というのではないがお前驚いてはいけんよ、吉さんはあつちで病死したよ。』

『マあ！』とお絹は蒼あおくなりて涙も出いでず。

『実はわたしも驚いてしまったのだ、昨夜何屋ゆうべの若者が来て、これこれの客人がすぐ来てくれるというから行って見ると、その人はあつちで吉さんとごく懇意こんいにしていた方で、吉さんが病気を親切に看病してくださったそうな。それで吉さんの死ぬる時吉さんから二百円渡されてこれを三角餅の幸衛門に渡し幸衛門の手から

お前に半分やってくれろ、半分は親兄弟の墓を修しゆふく復する費用にしてその世話を頼むとの遺言、わたしは聞いて返事もろくろくできないでただ承知しましたと泣く泣く帰つて来ました。』

『マアどうしたらよかろう、かあいそうに』とお絹は泣き伏しぬ。『それでは遺言どおりこの百円はお前に渡すから確かに受け取つておくれ』と叔父の出す手をお絹は押しやつて

『叔父さんわたしは確かに受け取りました吉さんへはわたしからお礼をいいます、どうかそれで吉さんの後あとを立派に弔うてください、あらためてわたしからお頼みしますから。』

(明治三十三年九月作)



# 青空文庫情報

底本：「武蔵野」岩波文庫、岩波書店

1939（昭和14）年2月15日第1刷発行

1972（昭和47）年8月16日第37刷改版発行

2002（平成14）年4月5日第77刷発行

底本の親本：「武蔵野」民友社

1901（明治34）年3月

初出：「太陽」

1900（明治33）年12月

入力：土屋隆

校正：蔣龍

2009年3月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 置土産

国木田独歩

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>